

タレント/TKO

木本 武宏さん

お笑いコンビ「TKO」のツッコミ担当として、コントライブのほか、テレビ・ラジオ番組でご活躍中の木本武宏さん。その木本さんに、下積み時代から現在に至るまで考え抜かれた「ツッコミ」考、ネタを完成させていくプロセス、情報の伝え方の工夫など、弁護士の業務のヒントにもなる、言葉で人の心をつかむコツを伺いました。

(聞き手・構成：高橋辰三、神原あゆみ)



——木本さんは、TKOとして現在もコントライブ等が続けていらっしゃると思いますが、コントのネタはご自身の経験によるものですか。

コントはコンビで作るんですけど、経験から、こんなやついるよねというような、大阪弁でいうと「おるおる」な人とか、シチュエーションというのをいつも探してますね。共通点は、切ないとか、情けないとか、かわいそうとか、簡単に言ったら間抜けなのかもしれないですけど、でも何かそこにちょっと哀愁とか、みんなの中にもあるし、みんなのそばにもいると思うんですね。結局、お笑いって共通点だと思うので、僕らは共通点を見つけているという感じですかね。

例えば、芸能界で昔1曲当ててすぐ脚光を浴びた人で何十年も経った後、今はほそぼそと頑張っていますと認識している人はかわいそうじゃないですよ。でも、1曲当てて1回脚光を浴びたことで頭が麻痺して、まだ脚光を浴びていると思っている人って切ないじゃないですか(笑)。

そういう人って会社でもいるじゃないですか。昔、すごくいいポストに就いていて今は窓際なのに、まだ重要なポストにいてたときの態度でいるような人って、そういう人って切ないよね、というところが面

白いですね。だから結局僕らはそういう切ない人という共通点をつかまえにかかっていますね。

——コントという形にしていくときに、TKOのお二人で役割分担はありますか。

僕がツッコミで相方(木下隆行)がボケなので、同じようにアイデアを出し合うんですけど、意見が食い違ったときは絶対相方の意見を優先しようと思うんですね。それが違うと思っても。やっぱり生ものなので、ボケる方がやりたいという温度でやらないと嘘になるので。それでだめだったら、もう1回作り直そう、ということはしますけど。1回ネタを舞台やって、はい、これで完成となったことは今までないですね。

——ネタ合わせのときにどういう視点でネタを完成させていくのでしょうか。

伝わったか伝わってないかという言い方をよく僕たちはしますが、お笑いだけじゃないと思うんですけど、自信を持って何か披露するときって、ついつい説明不足だったりすることがあるじゃないですか。

逆に僕らがいろいろな専門家の人と仕事をする

きもそうなんですけど、相手はもちろん分かってくれていますよねというラインと、僕らが分かっているラインって絶対食い違うじゃないですか。でも説明しすぎたらすぐ上から目線に見えたりとか、はしよりすぎたら伝わらなかつたりして、その真ん中を探す作業をたぶん一生していかないとだめなのかなと思いつながらいつもやっていますね。

—— 実際ライブでコントをされて、同じネタでも東京と大阪での反応の違いというのはありますか。

全国ネットのお笑い番組が増えてきて、見る番組が共通してきているので、昔に比べたら標準化はされていると思うんですよね。

でもお笑いライブに足を運ぶお客さんは、言葉選びで全然違うときはありますね。大阪は分かりやすい言葉に反応する、むだな説明はいらない。お前、アホかと言った方がウケる文化がまだ基本的にはあると思うんですよね。でも東京は、そのアホをアホ以外の、何かに例えた言い方にするとか、比喩がウケたり、言葉の受け止め方は違いますよね。やっぱり大阪の文化は基本的にええかっこすな、難しそうな言葉を使わんでええねん、アホでええねんと。東京はやっぱり、そこはちょっととんちを利かせてよ、という。

それって結局、東京っていろいろな地方の方が来ているから、その人たちに標準的に伝わる笑いというのが、たぶんひねりを利かせることによってそこに共感できるというのがあると思うんですよ。だからやっぱり全国の人が集まっている東京と大阪というのは、そういう意味では違いますね。

—— 東京に進出されてから、ツッコミの仕方などを変えてみたりされましたか。

ツッコミということに関して、東京に来てからものすごく悩んだんですけど、漫才にはツッコミが絶対いると思うんですけど、コントは究極はツッコミはいらないと思っているんですよ。

笑いが10として、常にボケが10だったらツッコミはいらないですよ。ボケが7ぐらいの笑いを取るボケだったら、残りの3をツッコミで補うという感じだと思うんですよ。だからコントは、もうおかしな人が舞台上を走り回っているだけでずっとお客さんが笑うわけじゃないですか。それをこっちはずっとびっくりしていたらいい。お客さんの代表でツッコミが舞台の上において、たまにシチュエーションの説明をすとか、それができたときにたぶん究極のコントだと思うんですよ。こんなシチュエーションがあったら面白いですよ。こんなものを見せるのがコントだから、ネタの中で、ボケる人間が何かした後に、そのコントとは全然違うフレーズを使って例えて突っ込むとその世界観が壊れるんですよ。余計なツッコミは抜いていって、顔だけとか、極論を言ったら、うわー、とかでいいんですよ。コントは。

—— では、コントでの木本さんの立ち位置を根本的に変えられたのでしょうか。

そうですね。結構気持ちを入れ替えましたね。僕はいつも、ほんまに伝えたいことだけを伝えやと言うんですよ。伝えたいことを聞いてくれるように、ちょっと初めに柔らかい話をして、ちょっとほんわかした空気をつくってから伝えたいことを伝えやという基本のことがあるじゃないですか。

でも、お笑い芸人も若い人はそうなんですけど、俺ってすごいやろうとか、こんなツッコミ方すんねんとか、本来の目的より我の方が勝っちゃうという人って、舞台でしゃべっても絶対ウケないと思うんですよ。目的が変わっているんですよ。35歳のときに東京に来たんですけど、それまで大阪で舞台をやっているときは、何かつめ跡を残してやろうと思って、ツッコミの中でも無理くり足して、俺も笑いを取るんだとか、そんな我が常にあふれていたと思うんですよ。でもそれは何かどこかで人としてのかわいらしさがないというか。

それで東京に来たときは相方に対して、こいつ、面白いでしょうという気持ちでやるようになって、スタンスがいつの間にか変わりましたね。

コントのときはTKOをアピールしたいわけで、だからTKOをアピールするときの一番の方法は何かなと思ったときに、相方は完全にコントというお芝居に入っているから、僕に対して来るので、僕がつなぎにならないとだめだと思ったんです。お客さんと相方のつなぎの役割でいるために、ツッコミが必要なときは突っ込むし、ツッコミがなくて伝わるときは薄めのつなぎでおらないとしつこい味になるじゃないですか、ハンバーグでも（笑）。

—— ツッコミの力を鍛えるために何か意識されている習慣などはありますか。

簡単に言ったら、できるだけ言葉を知ることなんですけど、ただ、突っ込むと考えるから難しくなると言うんですね。僕は普通の肩書はツッコミなんですけど、あまりツッコミと思ってなくて、例えば本当に相手の揚げ足を取らないようにするとかは意識しています。一番簡単なツッコミは相手の揚げ足を取ることなんですよね。そうしたらツッコミがうまそうに、賢そうに見えるんですよ。でも突っ込まれた人、気持ちよくないんですよ。だから突っ込まれた人が絶対損をしないようにと思って、突っ込んだ人がちゃんとかわいくなくなるようになるツッコミ方をいつも探しています。

鋭いツッコミといたら、ずばっと相手に刺さるようなことを言えばいい。これは攻撃ですからね。攻撃とツッコミは違うんだと常に心掛けています。だから絶対相手がおいしくなるようにしないと、と今は思っています。若いときはこれができなかったんですよ。

だから言葉で突っ込まないでいいときに、最高のツッコミは、素直に笑うことだと思うんですよ。それが相手もうれしいし、ツッコミの一番の役割だと思うんですよ。

—— 情報番組等で何かを説明されたりする場面もあると思いますが、伝わりやすい話のために工夫されていますか。

情報番組でいつも気を付けているのは、ちょっと知っているぐらいのものなら100%知らない顔をするようにしているんですね。でも、もともと僕、正反対の、知っていることは知っていると言いたいタイプの人間だったんです。仕事が全然ない時代に、何があかんねん、俺ら、と思ったときに、テレビに出て物の伝え方が上手な人って、絶対知らないふりどころか、知らないと自分に錯覚させているのか、情報を専門家の人から聞いたときに、ちゃんと新鮮なりアクションをするじゃないですか。

でもちょっと知っているという感じを出したい人というのは、へえと言いながらも、ですよとか相づちを打っているんです。そんな人の話って視聴者には一切入ってこないんですよ。あなたが知っているかどうかなんて今どうでもいいと。だから僕は「ですよね」を禁止しようと思ったんです。なるほどとちゃんと素直に言える自分で情報番組は出るようにしたんですけど。でも大変なんですけどね。ちょっと知っていても、大人やのに、「へえ」とか言って、これ、俺の身内が見ていたら俺のことをアホと思っているのと違うかとかね（笑）。

あと、知ったかぶりをやめようと思って、結構それも戦いました、自分と。知ったかぶりをする人ってたいてい勉強家で、本当にちゃんとされている方が多いんですよ。だから頑張っていることだから発表したいがなと思うんですけど、ちゃんと人の説明を聞くようにしていると、相手がこっちの話も聞いてくれるようになるんですよ。

相手の話を聞いて、相手の話でその日が終わるんだったら、それが一番楽なんです。相手がそれで楽しかったらそれでいいなと思うんですよ。それで自分に質問をしてきてくれたらやっとなしゃべるぐらいにしておこうと思っているんですよ。求められている分量だけしゃべるといって特訓もめっちゃしましたね。



相手が分かってくれてますよねというラインと、僕らが分かっているラインって絶対食い違う。でも説明しすぎたら上から目線に見えたり、はしよりすぎたら伝わらなかったり、その真ん中を探す作業をたぶん一生していかないとダメなのかなと思いつつやっていますね。

木本武宏

——俳優としての活動もされていて、ドラマ『ルーズヴェルト・ゲーム』では弁護士役をされましたが、今までコントで弁護士をやったことは？

まだないんですよね。

——何かその役をするために演技で気を付けたことはありますか。

全然作戦を立てたりしないんですけど、友達が弁護士をやっていて、僕、そいつと一緒に学生時代、弁護士を目指していたんですよ。僕、大学を落ちて、そいつはその大学に受かって法学部に入って、負けたくないから芸人になろうと思って芸人になっているんですよ。

そいつに、「弁護士の人って、何に気を付けたらいい？」と聞くと、「とにかくじっと相手の目を見ていたら雰囲気が出るのと違う？俺らって結構一生懸命話を聞いているふりをするからさ」と（笑）。それで「聞いているふりをしておいたらええねんな」と言って、それだけ気を付けていましたけど。

——せっかく弁護士役をされたということで、今後、司法系のコントというか、お笑いネタをやりたいとか、そういう思いは？

めっちゃ難しいでしょうね。でも裁判のコントをやってみたいんですよね。でもこれってものすごく難しい。専門用語もいっぱい出てくるし、せりふもいっぱい。

なおかつお客さんに分かるようにしないとダメじゃないですか。映画とかお芝居だったらできるかもしれないですけど、1回5分ぐらいのコントで裁判といっても…。でも裁判って面白いから、そういうのができたら楽しいかなと思うんですけど。

まじめな場だからこそ、面白くなるということがあるし、取り調べとかの場面をずっと演じていくのも面白いですもんね。

——ぜひ期待しています（笑）。本日はありがとうございました。

プロフィール きもと・たけひろ

1971年生まれ。大阪府出身。朝日放送「新人グランプリ」新人賞、関西テレビ「爆笑BOOING」第4代グランドチャンピオン、フジテレビ「OFJ」第2代グランドチャンピオン。趣味は釣り、サッカー、木工、MAC。NHK（Eテレ）の情報番組のほか、ドラマやラジオでも幅広く活躍中。